



あなたの仕事は何ですかと言われるのがとても困る。生きていくためには何でもやるのだと思っている。このあいだ妙義山の麓の山荘に泊まったが、その主人もまたそんな人であった。「何をと言われても、大工もやれば、畑も少し、・・・」と言いよどむ気持ちがわかる。確かに今の日本の社会から見れば、いろいろ仕事を変えるのは不審なのだし、ナントカー筋何十年というのは尊いことであるのはわかるのだけれども。それだから昨年日本国が父に旭日ナントカ賞をくれたのもみんな地道な努力を認めているという証明でメダタ

イことなのだけれども、本当は今の社会の方が分業化しすぎていて、便利だが沢山の事をやらねばいけなかった頃に比べると人間の生きる力が落ち、身も心も偏って来ているのではないだろうか。幅広く目を広げてどんどん身体を動かして解決していかなければならなかった人々と、じっと一つのことに張り付けられ続ける人々では、将来、ずうっと将来のことだが、共に傷つきあうか片方が片方を淘汰していくのではないだろうか。そう危惧しています。いくつかの事を深く理解しつつも、身の回りの事、床を張り替えたり、火を燃したり、料理をしたり、洗濯をしたり、こわれたものをなおしたり、生き物を育てたり、そんな頭と身体に縦横に電気が走っている人々が残っていくのではないだろうか。その前触れで今、男が不作なのが多いのだと理解している。女はまだ生活全般から切り放されていないから、生きる力がまだあるのに、男は純粹培養で働きアリにさせられているうち、人間の本来持っていた力を失いつつあるように見える。たくさん遊んできた人間のほうが魅力があるように見えるのもそんなわけかもしれない。

しかし女は強くなった。このあいだも妙義の麓で飲んだが、なにせネパールやモンゴルも一緒に流鏝馬なんかも見てしまった女たちだし犬ぞりで走ってきたものもいるのだから生きがいい。元気良く飲みながら「男とあろうものは馬の一つも乗って、弓の一つも放てるようなものでなければいかん。」とグラスを振り回すと「そうだ、そうだ。」と声があがる。旗色が悪くなってきた、やばいと思ってさっさと隅で寝てしまったら明朝「いびきがうるさい。」とみんなから怒られた。この狭い世界に逃げるすべはないのだから、男もしっかりせねばいかんとしみじみ思った。以上暑さに参りながら書く。

サンシャインの製本教室は今度は7月からです。今度は絵本をつくるのもやってみようと考えています。7月からの申込先はサンシャインシティ文化センター事務局 03-3987-2381です。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX 03-5600-0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com